

令和四年度 入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】 説明的文章（論説）

〈出典〉

『文学のトリセツ―「桃太郎」で文学がわかる!』（五月書房新社）

文学について興味はあるが「何から読めばいいのかわからない」と思っている人に向けて書かれた、やさしい入門書。

「文学」とはどんな学問なのか、どのような価値があるのか、どのように勉強するのを知りやすく解説している。「文学」の奥深さと面白さを学べる一冊。

〈筆者〉

小林真大（こばやしまさひろ）

山形県生まれ。早稲田大学国際教養学部卒業。インターナショナルスクールにて国際バカロレアの文学教師を勤める。著書に、『やさしい文学レッスン―「読み」を深める20の手法』（雷鳥社）、『「感想文」から「文学批評」へ―高校・大学から始める批評入門』（小鳥遊書房）など。

問一 漢字の書き取り

a 領域、b 留、c 貧困、d 抽象

漢字や語句に関しては、本文中でどのように使用されているかもあわせて学習したい。辞書などを用い、類語について知識も広がるよう学習したい。

問二 語彙

A「とりわけ」は「ことさらに。特別

に」の意味、よって正解はイ。B「いかなる」は「どのような。どういう」の意味、よって正解はア。

問三 構成・展開の意図

傍線部①の意図を問う問題。傍線部①の直前に、「脱構築を理解するためには、『構築』という言葉について知る必要があります」とあり、正解はエ。アは「デリダや他の思想家の考えを理解するためには」と目的がずれているため誤り。イは「紛らわしい意味を区別するため」、ウは「話題の入口を用意するため」が本文に根拠を見出せないため誤り。

問四 要旨の理解

傍線部②の説明を答える問題。傍線部②は③にあるが、答えの要件は⑧に「構築とはすなわち、社会を構成する様々な二項対立のネットワークなのです」と明言されており、正解はウ。アは「結婚に関連した論理的なシステム」、イは「世界が成り立っているという事実」、エは「思想家たちの主張」が誤り。

問五 要点の要約

傍線部③に関する具体的な記述をたどり、正誤を見定める問題。④から⑦を参照する。正解はア。イは「インドネシアだけは唯一」が本文の内容と反する。ウは「当初からの目的であった」、エは「西洋社会が最も優れているという考えを強く批判した」が本文にない記述であり、誤り。

問六 因果関係の理解

傍線部④の説明に答える問題。前問をステップにして考えたい。正解はウ。アは「学術的な根拠のない偏見」、「西洋以上に進歩している側面が明らかになった」が誤り。前者は知識人の間にも見られた見解であり、後者は「西洋以上」という記述が本文にない。イは「オーストラリアの先住民の神話の中にも西洋の神話と同様の対立構造が存在していたから」が誤り。エは「先住民の様々な習慣には代数学の理論が使われていた」が本文にない記述のため誤り。

問七 情報の図表への整理

表の該当する箇所に適切な語彙を本文から抜き出す問題。9の具体的な記述から、Aが「人類／自然」、Bが「おじいさんとおばあさん」、Cが「桃太郎」、Dが「鬼」である。

問八 内容と構成・展開のつながり

それぞれの形式段落における話題、また形式段落の内容的なまとまりを問う問題。正解はエ。アは「その社会的意義について解説している」が本文に反するため、誤り。イは「文学作品に限らないあらゆる学問領域において」、ウは「アジアの文化がいかに見直されることになったかが説明されている」。

【二】 文学的文章（短歌と短歌に関する文章）

〈出典〉

・短歌

塚本邦雄『感幻樂』（白玉書房・一九六九年）

【資料Ⅰ】

『鑑賞 日本の名歌』（角川学芸出版・二〇一三年）

明治以降の日本の名歌を、「自然」「生活」「人生」「社会」「恋」などのテーマにわけて、作品の背景や作者紹介、鑑賞のポイントなどを詳しく紹介している。

【資料Ⅱ】

『今を生きるための現代詩』（講談社・二〇一三年）

詩とは、詩を読むとはどういうことかをテーマに、豊かでおもしろい日本語表現の最尖端を考える。詩人たち明かす、至福のあじわい方を通して、詩は難解で意味不明とする考えに対して詩の本質を語りかける。

〈筆者〉

塚本邦雄（つかもとくにお）

一九二〇年、滋賀県生まれ。二〇〇五年没。短歌を中心に、詩、小説、評論と広範に執筆。一九八五年に短歌結社『玲瓏』を創刊し、主宰。歌集に『水葬物語』ほか二十三冊。受賞歴多数。

渡邊十絲子（わたなべとしこ）

一九六四年、東京都生まれ。早稲田大学文学部文芸専修卒業。鈴木志郎康のゼミで詩を書き始め、卒業制作の第一詩集

『Fの残響』で小野梓記念芸術賞を受賞。詩集に『千年の祈り』、『真夏、まぼろしの日没』など。

※『鑑賞 日本の名歌』は編集部編のため、筆者の情報は割愛。

問一 短歌の鑑賞

【資料Ⅰ】の空欄を補充する問題。内容理解を問う問題でもあるが、短詩型の知識を問う問題でもある。俳句は一句二句、短歌は一首二首と読むのでAはア。短歌の初めの五七五の三句が上の句、後の七七の第四句と第五句を下の句と言う。よってBがエ、Cがウ。「洗はば」「恋はば」は未然形に接続する助詞「ば」で仮定条件（くならば）、よってDはオが正解。また、「洗はば」「恋はば」を用いて対句的に表現しており、Eはキが正解となる。

問二 批評の根拠の理解（因果関係）

筆者の主張である傍線部①の理由を問う問題。まず、傍線部の主語が同段落冒頭の「そうした詩」であることを捉える。

「そうした詩」の指示語をたどりながら『生の実感』を読む人に想起させようリアリティーを感じさせるタイプの「詩」、「たとえば馬について書かれた詩だとすると具体的な感覚描写をとおして、『この詩に書かれた馬は、いかにも馬である』と感じられるような詩」、「そういう『自分ですでに知っている感覚の再現』をしてくれるものだけが『詩』なのかもしれない」などの記述を確認しておきたい。正

解はイ。アは「鑑賞方法は」と主語がずれており、また「専門的な知見が必要」などの記述は本文に根拠がない。ウは「詩として認めたくないものとなってしまおう」が、エは「そもそも詩として読もうとしてくれない」が本文にない記述。

問三 批評文の構成・展開の意図

例示の意図を問う問題。傍線部②の直前に「つまり」の要約表現を伴って『実感の再現』などとはほとんど無関係の詩なのだ」とある。『実感の再現』は前で問われており、その理解をステップに読み進めたい。傍線部②の後、「しかし」の逆接を挟んで、「この短歌は馬の具体的な馬らしさなどひとつも描いていない」と書いている。正解はエ。イは「馬に関する記述はいつさいなされない」が誤り。「馬のたましひ」という「馬」に関する記述はなされている。アとウについては、筆者の主張や鑑賞の一部としては正しいが、そのような詩の例として挙げられているわけではないので誤り。

問四 伝統的な言語文化に関する知識

1「小春」が冬。2「蛙」が春。3「月」が秋。いずれも小学校・中学校の授業で扱われやすい俳句に用いられる基礎的な季語。また、季語を調べる際には単に辞書で確認するだけでなく、歳時記も開いて言葉の理解を深めておきたい。

問五 俳句の鑑賞と複数資料の読解

本文の記述を踏まえ、それに該当する

例句を選択する問題。傍線部④直後、「ア フオリズム」などのやや難しい語句もあるが、「つまり」のあとの「馬という具体的な存在の实感を描写したのではない」という記述のみを踏まえたとしても解けた問題である。正解ウ。ア、イ、エは具体的な事物に対する描写が行われている。

問六 資料間の性質の理解（対比関係）

二つの資料を読み比べ、それぞれの特性と内容を問う問題。正解はア。イには「塚本の短歌を『実感の再現』を読者に体感させるタイプの詩である」とあり、本文とは逆のことが述べている。ウには「主観的な観点を一切排して」や「書かれている言葉の意味や効用のみに着目」とあり、誤り。エには「塚本の短歌を『再現力』ある詩の例として批評的に扱っている」とあるが、むしろ逆の例として挙げられているため、これも誤り。

問七 複数資料を踏まえた探究学習

複数のテキストを読解し、思考する問題。選択肢オ（生徒E）の「実感を再現させる歌と言えるね」が不適當。本文中では、むしろ、そのようなタイプの詩ではないと述べられている。

【三】 古文読解

〈出典〉

『宇治拾遺物語』

鎌倉前期の説話集。編者不詳。一九七話の長短編説話を集録し、ひらがな本位の

の和文体で記した典型的な説話集。

問一 歴史的仮名遣い

a 「やうなる」は、発音する場合は「au」↓「ou」となるため、「ようなる」となる。b 「笑ひける」は、語頭を除く「は行」は「ワ行」に改める知識を有していれば解答できる。解答の条件として全て平仮名で答えよとあるため、「わらいける」となる。c 「ゐにけり」は、「ワ行」の「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」と改めるため、「いにけり」となる。

問二 文語文中の語彙の理解

「いたく」はもとのかたちが「いたし」、程度のはなはだしい様子を示し、文脈にもよるが「ひどい」「激しい」などと解釈することができるため正解はエとなる。B 「わびて」は、物事が思い通りにならず困惑したり苦しんだりする様子を示す。「嘆く」「困る」などと解釈できるため正解はウとなる。現代語やこれまでに学習した古典作品で学んだ語句、文脈から古語を推測しながら読解をする技術・態度を求めている。

問三 文語文の特徴に関する問題

傍線部①「生侍」は、「ありけり。（いた）」と続くので、主語となる文節を作る「が」を補うのが適當である。よって正解はイ。傍線部②「我」は、「持ちたる物なし。（持っている物がな）」と続く。よって正解はア。傍線部③「文」は、「書きて（書いて）」と続くので、連用修飾語

を作り、時間・場所・目的・結果などを表す、「を」が適当。よって正解はエ。

問四 論旨の理解（同義関係）

「貯へたる物」は「今手持ちの物」と現代語訳する。傍線部の直後に「清水に二千度参りたることのみなむある（清水寺に二千度参りをした、その功德だけがある）」とあるので、正解はイ。

問五 係り結びの法則

文の結びは終止形だが、文中に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」があると、係り結びとなる。④「ある」は、傍線部を含む一文中に「なむ」という係助詞があるので、連体形で結ぶ。そのため、正解はエ。⑦「め」は、傍線部を含む一文中に「こそ」という係助詞があるので、已然形で結ぶ。そのため、正解はオ。

問六 論旨の理解（因果関係）

「謀る」には「だます」「欺く」などという意味がある。よって、「だますのだからと思った」ということが述べられているイが正解である。アは「うらやましく感じた」が、ウは「感心したため」が誤り。エは負け侍の言葉を受けたものではなく、また、オは双六で勝った侍は千日詣をしていないため不適当。

問七 論旨の理解（同義と対比関係）

この設問に取り組むにあたり、問五でも触れた「傍らにて聞く人」の発言に着目する。「謀るなりと、をこに思ひて笑ひ

ける」とあるので、負けた侍は勝った侍をだますつもりなのである。負けた侍は目に見えない「ものを真摯に受け取る」とする双六の相手を愚か者として見ていることがわかる。よって正解はウ。

問八 省略された主体（主語）の特定

「二千度参りつる事、それがしに双六に打ち入れつ」と書いて与えたのは、「負けた侍」である。そのためそれを受け取り、喜んで「伏し拝んだ」のは「勝った侍」である。よって、正解はウ。

問九 会話文の特定

会話文の見つけ方として、会話や引用を表す「と・とて」や、「言ふ・申す」などの語に着目することが大切である。双六に勝った侍の「いとよき事なり。渡さば得ん」の後に「といひて」と書かれているので、ここが会話文であることがわかる。よって、「いとよ」が正解となる。

問十 要旨の理解

本文を解釈して行く過程で、登場人物の心情・行動・その理由をとらえることが読解を行う上では大切である。本文は、勝った侍が千日詣を二度した経験という目には見えないものだが誠実な心で受け取ったことを読み取ることが大切である。よって「目に見えぬものなれど、まことの心を致して請け取りければ、仏、哀れと思しめしたりけるなめり。（目に見えぬものではあるが、誠の心を尽くして受け取ったので、仏も感心とお思いになられ

たのであろう」のアが正解。

〈現代語訳例〉

今は昔、人のもとに士官している若侍がいた。何もすることがないので、人のまねをして清水寺への千日参りを二度もした。その後さほどたないうちに、主人のもとに仕えていた同じような侍と双六を打ったが、ひどく負けて相手に渡すものがなかったところ、相手が激しく責めたてるので、困ってしまい、「わたしは、何も持っていない。ただ今手持ちの物といつては、清水寺に二千度参りをしたその功德だけだ。それを渡そう」と言った。側で聞く人は、「だますつもりだ」と思えばからしくて笑っていたが、この勝った侍は、「それは大いに結構だ。くれるならばもらおう」と言つて、(続けて)「いや、このままでは受け取るまい。三日精進して、この事情を神仏に申しあげて、おまえが渡すという証文を書いて渡すなら、その時こそ受け取ろう」といったので、「結構だ」と約束をした。その日から心身を清めて三日目という日、勝った侍が「では、さあ清水へ(参ろう)」と言ったので、この負けた侍は、「うまく愚か者に会ったものよ」と、可笑しく思い、喜んで連れて(清水へ)参上した。言う通りに証文を書いて、観世音菩薩の御前で師の僧を呼んで、事の次第を話してもらい、「二千度お参りしたこと、それをこれこれの者に双六の賭物として譲り渡した」と書いて与えたので、相手は受け取りながら喜んで伏し拝み、退出したのだった。

その後、まもなくしてこの負け侍は、思いがけないことで捕らえられ、牢屋に入れられてしまった。証文を受け取った侍は思いがけず生活に恵まれた妻をもらい、たいそう裕福な身となり、任官などにあずかって、豊かな暮らしをすることになった。

「(善行をつんだことは)目に見えぬものではあるが、(それに対し)誠意を尽くして受け取ったため、仏も感心しなされたのであろう」